

聖徳太子一四〇〇年御遠忌の 関連特別展を終えて

当館学芸部主任研究員 三田 覚之

思えばこの三年間、聖徳太子一四〇〇年御遠忌の関連事業とともに過ごしてきた。令和三年（二〇二一）には奈良と東京の国立博物館で特別展「聖徳太子と法隆寺」が開催され、当時東京国立博物館に在籍していた筆者は、開催前年から担当者の一人として参加したのである。

さて、遠忌とは高僧などの遺徳を偲んで、大きな節目となるメモリアルイヤーを行う法要のことである。聖徳太子の場合は、亡くなられたのが六二二年であるため、二〇二一年が一四〇〇年御遠忌にあたった。これは亡くなられた年を一回忌、翌年を一周忌、二年目を三回忌と数えるため、一三九九年目が一四〇〇年遠忌にあたるのである。

その記念に行われた特別展は、平成六年（一九九四）の「国宝法隆寺展」以来となる大規模なものであった。特に御遠忌という点を考慮して、名品展というよりも、聖徳太子に関連する遺品や法隆寺の創建、太子信仰と関連儀式を中心とした展示を行ったのが特徴である。さらに図録についても新規写真撮影を多く行い、これまで以上に魅力的なものになったと思う。

この特別展のなかでも、特筆すべきは金堂東の間の本尊である薬師如来像と、聖霊院の本尊である聖徳太子像にお出まし頂いたことである。ともに法隆寺を代表する本尊像であり、一四〇〇年御遠忌という極めて特別な機会だからこそ実現したのと言えらるだろう。薬師如来像は

用明天皇が自らの病氣平癒のために法隆寺の創建とともに発願されたものであり、崩御の後にその遺志を継いで、推古天皇と聖徳太子が完成させた尊像と伝えられている。いわば法隆寺の起源を伝える像であり、篤い尊崇を集めてきた。堂外での公開は明治八年（一八七五）に東大寺大仏殿回廊を会場として開催された第一次奈良博覧会以来のことで、人生のなかでこの尊像に親しくまみえ得たことは、本当に幸せな体験であった。

また聖霊院の聖徳太子像は、法隆寺において太子その人として特に厳格に守られてきた尊像であり、一般への公開は「国宝法隆寺展」以来二七年ぶりであった。展示会場において、その漲る威厳に圧倒された方も多かったことだろう。

これらの尊像をはじめとした寺宝の多くは奈良と東京という二会場で公開されることもあり、会場の広さの違いを考慮した展示法や安全な輸送、両館の役割分担など多くの問題を抱えながら事業は進んでいった。なんとか無事に特別展が終了し、聖霊院に太子像をお戻ししてその扉を閉じた時は、もう自分の人生でこの扉を開くことはないと、展覧会成功の感謝とともに深い感慨に浸ったものである。

ところが令和四年（二〇二二）、この奈良国立博物館に異動することとなった。そして最初に行くことになったのが、北海道立近代美術館で開かれるという「国宝・法隆寺展」の担当であった。この特別展は、法隆寺の故大野玄妙殿下の御遺志を引継いだもので、奈良国立博物館は学術協力という形で、寺宝の輸送・展示や解説文執筆を中心とした業務にあたった。聖徳太子が亡くなられてまさに一四〇〇年目のこの年、大取となる特別展が控えていたのである。

札幌市で開催という極めて長距離の移動に備え、作品の梱包や輸送法に関係各位の多大な努力が払われ、筆者は再び聖霊院の聖徳太子像とまみえることとなった。しかも今回の特別展には中宮寺の御本尊である菩薩半跏思惟像もお出ましになることとなり、一連の遠忌事業を締めくくる大変に充実した内容の特別展を開催することができた。

奈良・東京・札幌という三つの会場で行われた一連の法隆寺展。ご覧になった多くの方々にとって、聖徳太子という存在に思いを馳せることは、これからの時代を作っていく上での示唆をも得る機会となったことだろう。一〇〇年に一度というこの貴重な機会に、展覧会の担当者として参加できたことに深く感謝をしている。



奈良博会場のオープニングに伴う法要の様子